

作文例②

「一段落目」好きな教科と嫌いな教科を簡潔に示す。

(例)

好きな教科は国語と技術・家庭科などの副教科です。嫌いな教科は数学と歴史です。

「二段落目」好きな教科についての説明

(例)

国語がなぜ好きかというと、たいして読書なんかしないのに、私には読解問題がゲーム感覚で解けて、読書好きの子よりもテストでいい点を取れるからです。私のクラスに、「国語の読解問題は答えが一通りとは限らないはずだ」、みたいなことを負け惜しみで言い張る人がいるのですが、あらかじめ一つしか答えが決められていないことを前提に、その答えを推理していくのが読解問題の楽しさだと思います。それに、筆者の言いたいことは一つしかないはずで、いくつも解釈が許されてしまったら、言葉なんか通じなくなってしまうと思います。文章に書かれていることをしっかりと読み取って、論理的にただ一つしかない筆者の伝えたいことを知る力は、言葉を使って生きている人間にとって、一番大切なことだと思います。技術や家庭科が好きなのも、人間として生きていくために、実際に必要となることを教えてくれるからです。英語などは、学校で勉強していい成績をとつても、実際に使える人は少ないそうです。人間は、生活に密着した知識でないと、本当に役立つ道具とすることはできないと思います。学校で教えてくれる教科の中で、技術と家庭科ほど、私たちの実生活に役に立つ教科はありません。私は、中学校ではもつと技術と家庭科の時間を増やしてほしいと思います。

「三段落目」嫌いな教科についての説明

(例)

次に嫌いな教科についてですが、数学は国語と違って、将来生きていくのに役に立たない知識ばかり扱っている気がします。私の父は自分で作った会社の社長を務めています。中学生の頃から数学が嫌いでした。その父がよく言うのが、「算数は絶対に役に立つ。でも、方程式ってポイントに使わないんだよねー」という言葉です。私も、図形の証明問題とか、理系の道に進む人でなければ必要ないと思います。正多面体の数とか覚えて何に役立つのか理解に苦しみます。ただ、学歴は役に立つと思うので、それなりに勉強して、まあまあ成績はとっています。歴史については、歴史の本を読むこと自体は好きなのですが、教科書にある歴史の知識が信用できません。ある本には、「聖徳太子は実際にはいなかった。冠位十二階の制度も、十七条の憲法も、蘇我馬子たちが行った改革をモデルにした架空のもので、その後の政権を正当化するために、聖徳太子という皇族が素晴らしい政治を行ったという話が作られただけ。」といったことが書いてありました。他の本には、「今事実だと信じられている歴史の多くは、百年後には否定される」とありました。私たちは何を覚えているのでしょうか。

「四段落目」結論・まとめ

(例)

一応これが、現在の私の好きな教科と嫌いな教科です。でも、人間なので今嫌いな教科が好きになり、好きな教科が嫌いになることだってあるのかな、と思っています。